ローベルト・ムージル『愛の完成』における「閉じ込め」と「拡散」の契機

石　﨑　知　己

ローベルト・ムージル『愛の完成』（1911）は全体の分量が40ページに満たない短編小説だが、当時の書評で「ドイツ語で書かれた最も難解な作品のうちの一つ」と評されたほどの複雑な文体で書かれている。この難解な文体をめぐっては、これまで主に認識批判の文脈に関係づけるか、あるいは因果関係に基づいて登場人物の心理を描く伝統的な物語に対する批判として理解するという形で議論がなされてきた。本発表では、そのような議論の一歩手前に留まり、書かれた文字としての言葉が持っているより表面的な次元に目を向けることで、この文体が持つ別の効果を分析することを試みた。

そこでまず、この作品の語りの手法が最も顕著に現れているとみなしうる列車移動の場面に注目した。主人公クラウディーネが娘の通う寄宿学校へと向かうこの場面では、増殖する比喩や何度も織り込まれる主人公の回想が叙述の時間を途方もなく長引かせて物語の時間を圧迫してしまうために、列車に乗る主人公が動けなくなるという現象が見られる。文体のレベルで引き起こされるこの麻痺状態は、物語の中で主人公が繰り返し訴える「身動きができない」という嘆きのなかにも密かに反響することで作品の中心的主題を形作っていく。本発表はこの現象をある種の「閉じ込め」と理解し、それが作品に「扉」や「堅い壁」といったモチーフを招き寄せる一方で、それに対立する「抜け出すこと」の主題として、物の表面から染み出し、広がっていく「水」や「音」がその周囲に配置されることを明らかにした。その際、主人公が車窓から眺める灌木の枝先から水滴が滴り落ちる描写を取り上げることで、具体的にそれらがどのような形で組織されているかを確認し、それが小説のなかで主人公自身が滴り落ちるように感じるという一見奇妙な描写を準備していることを指摘した。

こうしたモチーフの展開と並行して文体のレベルでは、複数のセンテンスを力づくでひとつにつなげていきながらも、ついには文字が形を失うまでに分解した「…」という表記によって文章が断ち切られてしまうという事態が現れる。このような両極端の表現上の揺れには、閉じ込めの外へと抜け出て行こうとする主人公に対して、彼女を再び閉じ込めようとする書き手自身の欲望が働いていると考えることができる。この閉じ込めの操作は、「線」や「輪郭」といったモチーフを利用しながら主人公を己の形へ変形してしまおうとする誘惑者との間で競合関係を産み出してしまう。そこに、この小説を執筆するそもそもの動機となったムージルの「嫉妬」という契機を見ることができるのではないかと結論付けた。